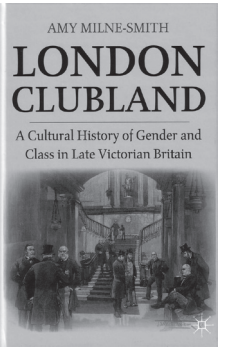
書　評



Amy Milne-Smith, *London Clubland: A Cultural History of Gender and Class in Late Victorian Britain* (Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2011)

松本　朗

ロンドンのペルメル、セント・ジェイムズ通り、ピカディリーの界隈は、ヴィクトリア朝後期には30以上ものジェントルマンズ・クラブが壮観を呈した「クラブ地区」であったことで知られる。イギリスのエリート階級に属する男性が食事や社交を目的に使う会員制クラブであるジェントルマンズ・クラブの存在は、オスカー・ワイルドの戯曲やアーサー・コナン・ドイルの小説などを通じて多くの人に馴染みのものであろう。だが、意外にも、ジェントルマンズ・クラブに関する本格的な学術的研究はこれまで「不在」であったという。この本は、その排他性ゆえに謎めいた空間であるジェントルマンズ・クラブの内部へと読者を誘ってくれる貴重な初の研究書である。

カナダの歴史研究者ミルン＝スミスがトロント大学に提出した博士論文が基になっているこの本は、19世紀後半から20世紀初頭にかけて書かれた書物、雑誌記事、新聞記事、個人の日記、書簡など多くの一次資料を渉猟して、当時のジェントルマンズ・クラブの内部で見られたホモソーシャルな社会活動を、内側と外側の両方から活写するものとなっている。そこで明らかにされるエリート男性の生活様式と理想像は、同時代のジェンダーと階級の概念を私たちがこれまで知らなかったかたちで明らかにするのだが、この本の価値はその点だけにあるのではない。この本のもう一つの重要性は、クラブの草創期の、イギリス帝国が比較的安定していた時期から、その後、クラブ地区を標的とする1886年の労働者の暴動、20世紀初頭の女性参政権運動、そして二つの世界大戦といった、国家を激しく揺さぶる動きが次々と見られた時期にかけての歴史性の中にジェントルマン

ズ・クラブを置き直すことによって、クラブの男性の〈男性性〉だけでなく〈エリート性〉が、徐々に、しかし確実に変容したことを明瞭に示した点にある。つまり、ここでは、ジェントルマンズ・クラブの文化が、その初期から、第二次世界大戦時の空襲でその建物の多くが焼失するまで、コンパクトに歴史化されているのである。

ジェントルマンズ・クラブのルーツは、1693年にセント・ジェイムズ通りにオープンした「ホワイツ」と呼ばれるチョコレートハウスにある。チョコレートハウスやコーヒーハウスは基本的にオープンで民主的な空間として知られるが（チョコレートハウスとコーヒーハウスは厳密には区別すべきだと思われるが、ここではミルン＝ハウスにしたがって、クラブとの関係ではほぼ同様の機能を果たしたと考える）、17世紀中葉から、コーヒーハウスの奥の部屋や片隅を利用して、政治的・経済的・文化的関心を共有する者が集まり、ジェントルマンズ・クラブに近いものを緩やかに形成するようになった。なかでもホワイツでは、貴族階級の男性を中心とする地主や政治家たちが、政治的関心というよりはギャンブルへの情熱をもとに、賭での損失額をきちんと支払う信用のあるジェントルマン同士として集まり、「ホワイツ・クラブ」を形成するようになった。

ホワイツ・クラブは、1736年には組織としての規則書を作成しているが、そこには、のちのジェントルマンズ・クラブの重要な要素がすでに現れている。たとえば、規則書には、入会希望者についての賛成・反対の投票の過程、会費、来客を連れてくるときの扱い、賭などに関する規定が細かく記されている。そして、ホワイツ・クラブは、1755年に「ホワイツ」のほぼ向かいに独立したクラブハウスを構え、ジェントルマンズ・クラブ第一号となるわけである。

その後、同様の過程を経てジェントルマンズ・クラブが次々と設立されていく。ここで興味深いのは、カードによるギャンブルが支配階級にとって「許容範囲内の悪習」であった18世紀には、クラブは主に遊興の場であったのだが、時代とともに過度の「悪習」は容認されなくなっていき、クラブの質が、遊興や余暇の場としての性格をとどめながらも、徐々に変化したことである。たとえば、摂政時代のクラブは、ダンディたちがファッションや洗練された振る舞いを競いあう空間となったが、クラブは

19 世紀後半までに、リスペクタブルなエリートである田舎の地主や軍隊の将校たちがロンドン滞在時に関心を同じくする人々とともに上質の食事をとり交際をする静かで上品な空間としての色彩を強めながらその規模と知名度を拡大していく。つまり、ヴィクトリア朝の規範が国民に浸透し、イギリス帝国が拡大するとともに、クラブにおける男性も、帝国の支配階級としての自信、威厳、勇敢さに満ちあふれながらも、その〈男性性〉を抑制したかたちであらわすことが理想とされるようになっていくのである。同様に、クラブハウスの建築や内装、クラブで提供される食事、図書館などの設備、スタッフによるサーヴィスも、上品な雰囲気の中に豪華さを顕示するものへと変わっていく。

この本は、このようにクラブの草創期から成立にかけてを包括的に描いた後（第 1 章）、イギリスのリベラリズムの象徴的中心として機能した「リフォーム・クラブ」、保守党勢力の中枢を占める「カールトン・クラブ」など、個別のジェントルマンズ・クラブの内実に分け入ることはせず、むしろヴィクトリア朝後期のクラブ全般に見られる特徴を、（入会希望者への）反対投票（第 2 章）、クラブにおける行儀の悪い振る舞い（第 3 章）、クラブにおける男性のゴシップ（第 4 章）、家庭の役割を果たしたクラブ（第 5 章）、やんちゃな独身男と不良夫（第 6 章）といったテーマに着目しながら検討していく。言い換えれば、ミルン＝スミスは、「どのような人物が入会不適格と見なされるのか」、「他のメンバーから苦情を受けたり、場合によっては退会処分になったりする〈非紳士的な〉振る舞いやゴシップとはどのようなものか」など、クラブの内部に通じた者でないとわかりにくい微妙な境界線上にあるジェントルマンのコードを、当時の日記、新聞記事、雑誌記事などの一次資料から明らかにしていくのである。

そのようなクラブのあり方で筆者にとって興味深かったのは二点。一点目は、クラブが、その排他的で上流階級的なイメージゆえに、多くの男性たちの憧れの的であったにもかかわらず、実は、商売を行う上層中産階級（アッパー・ミドル・クラス）などのにわか成金をも受け入れていくことによって、ひそかに社会の流動性を促しつつ、〈排他性〉の幻想を巧妙に維持した点である。これは、クラブが 19 世紀のイギリスで著しい発展を遂げた大きな要因であったとい

う。

二点目は、19 世紀のエリート男性にとって、クラブが〈家庭〉の代用物として機能した側面があり、それゆえクラブは、「ホモソーシャルなドメスティシティ」とミルン＝スミスが呼ぶものを具現化したという指摘である。たとえば、クラブマンの中には、朝 9 時にクラブへやって来て、新聞を読み、友人たちと昼食をとり、その後も図書室で読書をしたり、手紙を書いたり、訪問者と会ったり、友人たちと夕食や食後酒を楽しんだりするなど、1 日の大半をクラブで過ごす者が数多くあった。こうしたクラブの快適さを保証したのは、その充実した設備と会員の好みを熟知するクラブの使用人であった。つまり、一般に 19 世紀の中産階級（ミドル・クラス）の家庭は、男性の所有物として、また男性が感情面での癒しを得る場として構築されたと言われるが、実は、プライヴァシーや安全の感覚が支配的であるはずの家庭内（ドメスティック）の領域には、商売や政治などの目的をもつ訪問者など、摩擦に発展しうるパブリックの要素が入り込む余地が大いにあったし、また、女性を中心に機能する 19 世紀の家庭には、パブリック・スクールや大学など男性だけの環境で育った男性が馴染みにくい側面もあった。ここで「ドメスティシティ」という言葉を住居に存在するなにかに限定せず、「ある空間や心理状態を具現化する概念」と捉えるならば、クラブが提供したのは、まさに「ホモソーシャルなドメスティシティ」であったということになる。この議論は、19 世紀の男性、ジェンダー、家庭というテーマでは最重要の先行研究である John Tosh, *Manliness and Masculinities in Nineteenth-Century Britain: Essays on Gender, Family, and Empire* (London: Pearson Education Ltd., 2005)（『ヴィクトリア朝文化研究』第 6 号（2008 年）でも書評されている）が、「ドメスティシティ」を「住居」に限定し、男性と女性や子供との関係に見られる相克を検討したことへの批判的介入として、評価されてよいだろう。

この本の最終章は、1886 年にクラブがエスタブリッシュメントの砦として労働者の暴動の標的となった後、次第にその社会的・文化的役割を失っていくさまにあてられている。そこで示される労働者やスラム街とクラブの関係も読み応えがあるが、そうした変化を引き起こした要因の一つが、アメリカ型大衆消費文化であったことも重要だと思われる。たとえ

ば、20 世紀初頭には、上質の料理を提供するレストランやホテルがロンドンにいくつも登場したため、上流階級や上層中産階級（アッパー・ミドル・クラス）の男性にとってクラブの食堂は数ある選択肢の一つとなり、また男女が共に外で食事をする習慣が広まると、クラブの利用者はさらに減少した。こうした状況に対応しようとクラブは女性の食堂の利用を認めるようになるが、時すでに遅し。戦間期には、ブライト・ヤング・ピープルなど新しい男性性や女性性を有する若い世代はストリートでの宝探しやナイトクラブでの飲酒やダンスに興じ、リスペクタビリティへの関心は薄れる一方であった。そして、第二次世界大戦の空襲でクラブの建物が焼失すると、クラブは遂にその歴史的使命を終えることになる、とミルン＝スミスはこの本を締めくくる。

個人と国家を繋ぐ中間団体としてのクラブやアソシエイションの文化への関心が高まる中、この本が、ジェントルマンズ・クラブの文化史的意義をジェンダーと階級の観点から明らかにする優れた業績であることは間違いない。これにくわえて、ジェントルマンズ・クラブがイギリス史において果たした役割をより深く理解するためには、個別のクラブが果たした役割、特にその社会的・政治的側面を検討することが必要となるだろう。それには、ミルン＝スミスが序章に付した注で言及するとおり、イギリスの歴史研究者 Seth Alexander Thévoz の博士論文 “The Political Impact of London Clubs, c.1832–1868” の出版が待たれるし、また、川北稔編・綾部恒雄監修『結社のイギリス史――クラブから帝国まで』（山川出版社、2005 年）所収の君塚直隆の論考「議会政治の結社――カールトン・クラブ」も、ジェントルマンズ・クラブの歴史的寿命がミルン＝スミスが論じるより長い可能性があることを示唆しており興味深い。クラブに関する研究が今後さらに刺激的なかたちで深化することを楽しみに待ちたい。